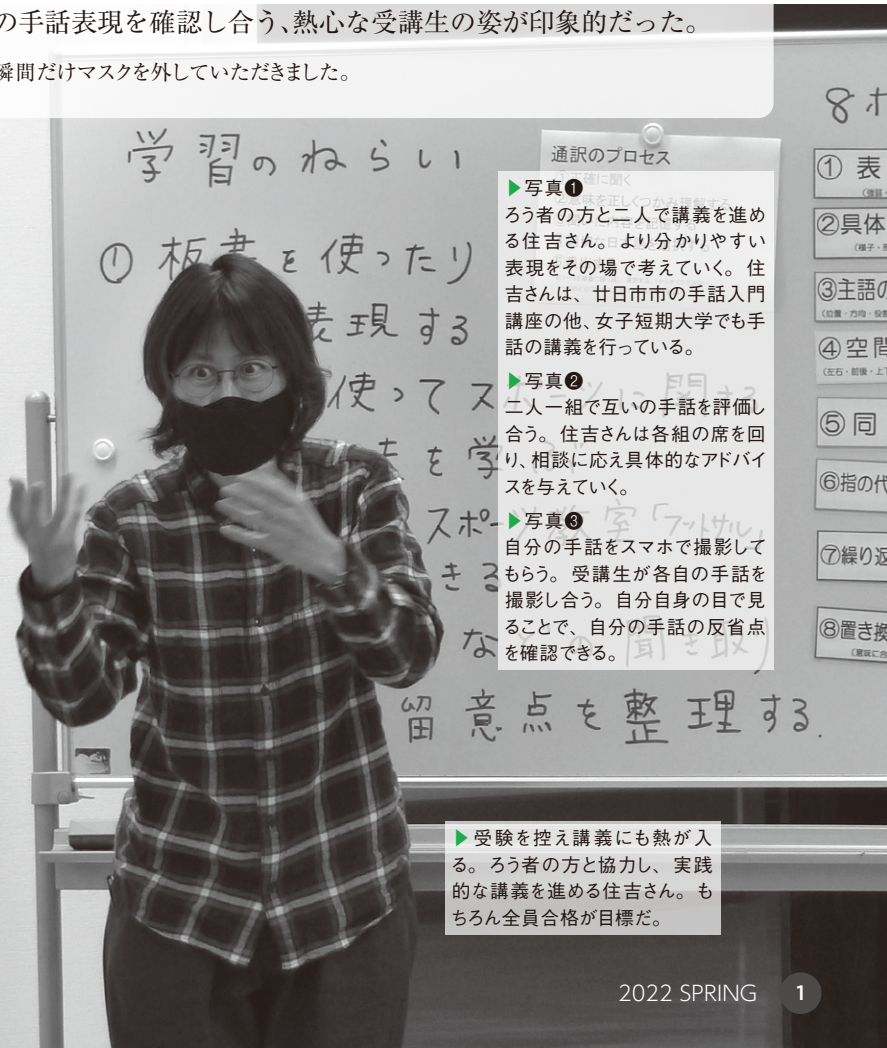
手話はクリエイティブでかっこ良い言語です！

住吉 美穂
広島市

「手話は、かっこ良くてクリエイティブな言語なんです！」住吉美穂さんは笑顔で胸を張る。場所は、広島駅近くの東区地域福祉センターの「手話通訳者養成講座」会場だ。女性８名、男性１名の受講生に、講師の住吉さんは手話を主体にぐいぐい講義を進めていく。それもそのはず、全員が受講４年目で、来月には手話通訳試験を控え、今夜は受験対策の総仕上げなのだという。ろう者の間でも人気のスポーツ「フットサル」のルールを紹介する動画を教材に、内容説明のコメントを手話通訳するのが課題だ。男女が一緒に参加できる、フリーキックは４秒以内、オフサイドが無い…といった内容をどう表現し、よどみなく伝えていくか。動画を見た後、二人一組になり表現方法などを検討しアイデアを出し合う。さらに順番に前に出て、手話をする様子を自分のスマホで撮影してもらう。講義後に各自で手話を見直すためだ。住吉さんは、「スポーツだから縮こまらず、大きく明るく表現しましょう！」とアドバイスする。休憩時間にも互いの手話表現を確認し合う、熱心な受講生の姿が印象的だった。

※グラビアページでは、写真撮影の瞬間だけマスクを外していただきました。



▶写真❶
ろう者の方と二人で講義を進める住吉さん。より分かりやすい表現をその場で考えていく。住吉さんは、廿日市市の手話入門講座の他、女子短期大学でも手話の講義を行っている。

▶写真❷
二人一組で互いの手話を評価し合う。住吉さんは各組の席を回り、相談に応え具体的なアドバイスを与えていく。

▶写真❸
自分の手話をスマホで撮影してもらう。受講生が各自の手話を撮影し合う。自分自身の目で見ることで、自分の手話の反省点を確認できる。

▶受験を控え講義にも熱が入る。ろう者の方と協力し、実践的な講義を進める住吉さん。もちろん全員合格が目標だ。

施設長 沖本浩美さん

仲間が日々楽しく成長できる“居場所”を守り抜くのが使命

社会福祉法人広島聴覚障害者福祉会「アイラブ作業所」。住吉さんの職場の正式名称だ。施設長の沖本浩美さんにお話を伺った。「ここは就労継続支援B型の作業所です。22年前、無認可の小さな一軒家で仲間5名、職員2名からスタートしました。現在は、仲間は46人（作業所32人、生活介護者14人）、職員は21人です。為政（いせい）者が変わる度に制度が変わり、苦しい局面もありましたが、仲間の居場所を守るために必死にやってきました。7年目の住吉は、生活介護グループのサービス管理責任者をしています。19歳から89歳の仲間たちの1年間の目標や支援計画などを作るのですが、一人ひとり異なる条件や想いに寄り添う必要があります。大変な仕事だと思いますが職員全員の奮闘ぶりには感謝しています」

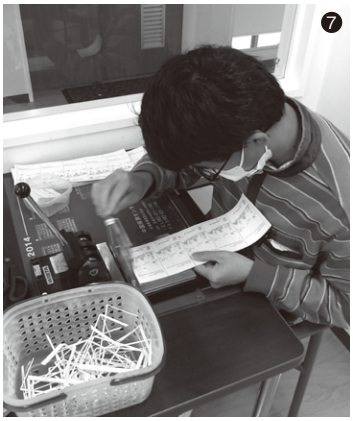
▶写真❶　1階が事務所、2階・3階に作業所がある。

▶写真❷❸
日当たりのいい屋上で野菜を育てている。この日は仲間たちが玉ねぎの苗を植えた。

▶写真❹　作業所で仲間に声をかける住吉さん。

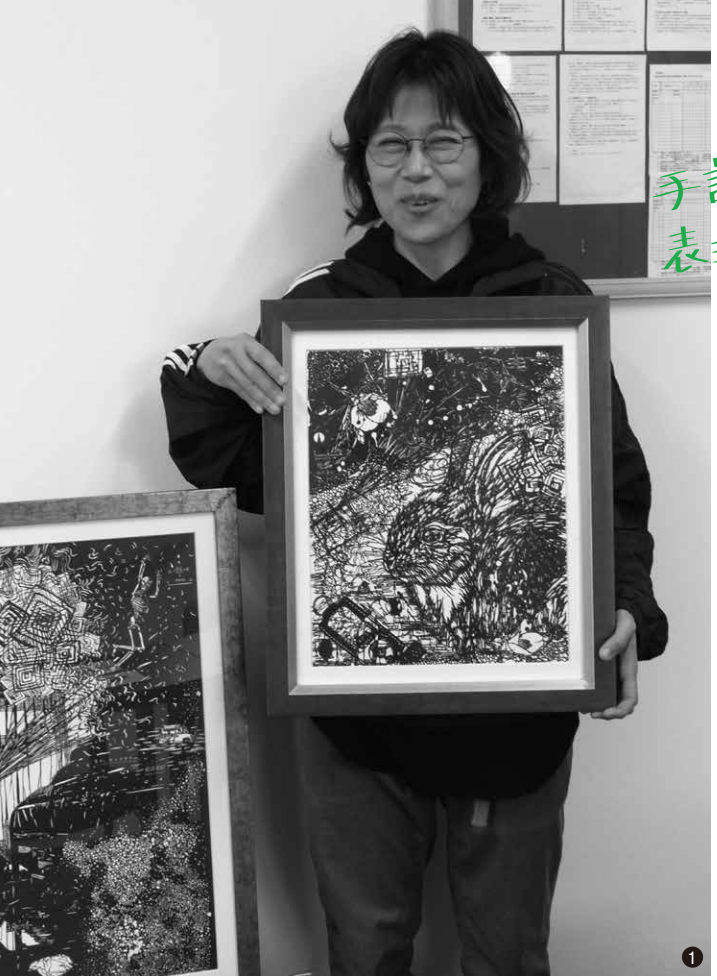
大学時代の友人との出会いが手話通訳への扉を開いてくれた

短大時代に同級生に難聴の友達がいて、筆談でやりとりをした。その後、美術大学の版画科に編入すると、聴覚障害の友人4人と仲良くなり、自然に日常会話くらいは手話でできるようになっていた。9年間京都で暮らした後、故郷の広島・宮島に戻り、伝統工芸の宮島彫の後継者育成事業に応募し4年間修業した。技術は身に着いたがそれだけで生計を立てるのは厳しく、たまたま廿日市の広報誌で手話奉仕員の募集を見て応募すると、経験があったおかげで運良くスムーズにその後の試験に合格。2年間勉強して福祉作業所に就職した。その後、今から7年前に「アイラブ作業所」に入所、現在に至る。これが住吉さんの略歴だ。振り返るとろうの人や手話との縁を感じる。いつもその道へ進めと後押しされている気がすると住吉さんは言う。「ろうの人たちは優しくて、アイラブ作業所の仲間にも、毎日私の方が元気をもらっています」



▶写真❺❻
この日は、平和記念公園を訪れた人に配布する「付箋セット」作り。千羽鶴の折り紙から作った再生紙を原料にしている。

▶写真❼
毎日の作業を通じてできることが増えていく、仲間との協同作業で物を作ることが喜びだ。



手話も切り絵もライフワーク 表現者として歩み続けたい

手話通訳者として、いつも高みを目指し努力を重ねてきた住吉さんは、もうひとつの顔をもっている。それは切り絵アーティストとしての顔だ。美術大学時代、住吉さんは切り絵に没頭。以来、独自の表現世界を求め研鑽を重ね、公募展などに出品し受賞もしている。手話通訳も切り絵も、自分にとっては表現。より良い表現を極めていきたいと住吉さんは言う。その才能は、アイラブ作業所でも如何なく発揮されている。全国共同作業所連絡会では毎年、全国約6,000か所の会員を対象に写真や絵画の公募展を開催しているが、住吉さんが指導する（本人はアドバイスという）ようになって、毎年のようにアイラブ作業所の仲間が入選・入賞するようになった。作業所の車のボディのデザインも住吉さんの作品だ。

写真／文　佐藤 篤

紙とカッターさえあれば、
どこでも作品を作れるのが
切り絵の魅力!
来年の年賀状を製作中!

▶写真❶ 事務室に飾られている作品。頭の中でカラーの絵画を描き、それをモノクロの切り絵に変換するという。

▶写真❷「盲ろう者友の会」の表紙。広報誌の表紙を飾った作品。特に広島カープの優勝を祝う号の表紙は話題を呼んだ。

▶写真❸ アイラブ作業所の車のボディの文字やマークは住吉さんのデザイン。